

11月11日の第7回講義、ゲスト講師で鈴木涼美『AV女優の社会学』福嶋亮大『復興文化論』開沼博『「フクシマ」論』全ての編集者である青土社・菱沼さんへの質問を以下の書評・インタビュー記事を読んだ上で書いて下さい（300字以上）

『AV女優の社会学』『復興文化論』『「フクシマ」論』といった三つの著作にはある共通点があると私は認識しています。それは、どの著作も主題として「日常に遍在するが、その特異性をしばし棚上げされてしまう特異点」であると思います。AV女優は、性欲の対象として今やなくてはならない存在ですが、なぜそうした対象化が遂行されるのか、性欲の持ち主たちはあまりにも無自覚でした。復興という言葉も3.11後は声高に叫ばれるようになりましたが、その場限りのボランティアばかりが先行してその復興自体が歴史的文脈的に位置づけられることがなかったように思います。そして、フクシマは既にヒロシマ＝ナガサキと並列に語られることをそのカタカナ化が物語っていますが、福島がどのような過程でフクシマになったのかを把握しないまま、我々は日常のニュースとしてフクシマの現況を消化しています。このような状況の中で、あえてそういった特異点を拾い上げ、通常の見方をずらした上での地平が開けているのが三著の特徴だと思います。そこで、そのような特徴を編集者として意図して、あるいは時代精神的なものに突き動かされて企画したのか、そうである場合は一体なぜそう思ったのか、この点についてお聞きしたいと思います。

質問 1.

復興文化論について、様々な時代で起きた文化の隆盛は「慢性的負傷」からの復興を目指す時に発生したと述べられておりますが、現代で起きている「原発」の問題を「負傷」と考えるのであれば、それらが完結するまでに、どういった分野に於いて文化の隆盛が起きるのでしょうか？

質問 2.

日本は民主主義でありながらアジア特有の結論の唯一性を重視していると、日中関係の三者鼎談に於いて述べられておりますが、主義思想を捨てて合理性を求める欧米型民主主義に日本は方向転換することが可能でしょうか？

質問 3.

もし日本が欧米型民主主義に舵取りした場合、日中関係はどのように変化するのでしょうか？ また、個々人での交流によって日中の相互理解を深めようとしている現在、欧米型民主主義を日本が掲げた場合、日中の市場はより親和なものになるのでしょうか？

- ・そもそもなぜ AV 女優の語りの編集に関わろうと思ったか
- ・AV 女優の話に触れることで、自分の中で何か以前とは変わった価値観や考え方はあるか
- ・AV 女優の編集に関わる前と後で AV 女優に対する印象は変わったか
- ・「本書の目標は、私たち現代の日本人が、この復興期にいかなる文化的生産を実現できるかを問題としている」と書評にあるが、菱沼さんは震災をきっかけに日本人がどういう文化的生産が

できると思うのか

- ・ヘイトスピーチについてどう思っているか
- ・フクシマ論の編集に携わって、開沼先生の「この視点は素晴らしい！」と思ったところはどんなところか
- ・菱沼さんが思う「理想的な編集者」はどんな人か
- ・「荒削り」の著者の良さはあるか、あるならばどんなところか

今回取り上げられた三方共に、論客としては比較的若く気鋭と思えますが、そういった、言葉を変えれば荒削りともとれる方々のどのような所が光っていたのでしょうか。あるいは見出したのではなく売り込みだったのでしょうか。どのような出会いを経て出版までの道のりを駆けていったのかお聞かせ願いたいです。

そして、菱沼さんがこれから共に仕事をしたいと思っている方はいらっしゃるのでしょうか。またはこのような本を手掛けたいというようなものがあれば是非お話しいただきたいです。今現在第一線で活躍されている編集者の方が、「今」どのように感じ未来を見ているのかに非常に関心があります。昔手がけた仕事の時にはこう考えていた、ということもありましたら合わせてお願いいたします。

どれもすごく現代的というか、トレンドな話題を扱った作品ですが、私たちの身近にあるさまざまな社会問題を「〇〇論」とか「〇〇学」として考察して一般の人に読んでもらうことが流行っているのですか？現代より以前のことは、起こってからある程度時間がたっている分、研究の密度が濃厚で〇〇論とか〇〇学として確立しやすいのでじっくり来るのですが、今現在進行中、あるいは起こったばかりのことに關してはまだ分からないことが多いと思うのです。なので、今提唱していることが間違っている可能性もあるんじゃないかと考えられます(昔のことに関しても言えなくはないですけど…)。私を感じるに、現代の諸問題を〇〇学風に、〇〇論風に考えてみたらこうなった、みたいな著作が最近の新書などにも多いと思うのですが、編集者の目線からはどう考えられているのでしょうか？

例えば『AV女優』の社会学』で、扱う題材としてはとても奇抜で読者の注目を集めそうなもので、どのようにいわゆる出オチにならずに掘り下げていくように作者と詰めていったのか知りたい。また AV 女優のようなそれまであまり論ぜられてこなかったコンテンツについて書籍を作るときはあまり馴染みのないものでも論として強度があるものが出来れば刊行するのでしょうか。それともやはりコンテンツとしての強度も考えているのでしょうか。

特に『復興文化論』、『「フクシマ」論』では同時代を反映したような、ある種の期間限定性（震災に対してそういうことを思っているのではありません）を孕む書籍は後世までずっと残ること（もちろん物質的という意味ではなく）を想定してつくるのか、それともその時点でのものを想定しているのか気になったので教えてください。

- ・手がけられている三冊はいずれも恐らく「色モノ」とラベリングされる可能性の高い作品だと思います。斬新な切り口を売り物として成立させるために常日頃心がけていることはあります

か。

・どのメディアも同様だと思いますが、「 $○○×△△+□□=ヒット$ 」といった方程式が存在しない中で、「これはイケルんじゃないか。勝てるんじゃないか」と確信するタイミングはいつ訪れるのでしょうか。逆説的に問うならば、「出してみないと分からない」ような博打に出た経験はありますか。

・書籍のみならず、あらゆるメディアが苦戦を強いられているご時世です。紙媒体の強みとして、アーカイブ性の高さ・所有欲の充足等、色々な側面が取りざたされていますが、正直今ひとつピンと来ません。菱沼さんが「これは紙にしか成せない」と確信していることがあれば、教えてください。

「AV女優の社会学」も「復古文化論」も「フクシマ論」も、今日本人がなんとなく気になっている、だけど自分ではわからないという人々の関心の中のかゆいところをついた本だと思います。特にAV女優というのは、男性は身近に感じている存在かもしれませんが、彼女たちがなぜビデオの中にいるのかまでわかっている人は少ないでしょう。あとの2つの東日本大震災に関する本にしても、被害の大きさ、またはどんな人がどのように大切な人を亡くしたかまでテレビの報道は伝えるけれど、それを俯瞰してみることはしていないように思います。それを見事にしたのが菱沼さんが担当した二冊なのではないでしょうか。前回のギフトであるダイヤモンド社編集者の村田さんから、人々の関心を引く、今注目される本を出さなければならないというお話を伺いましたが、その関心どころを見つけるのはなかなか難しいように思います。菱沼さんは、そのようなテーマをどのように見つけているのでしょうか。何か気をつけていることなどがあれば教えていただきたいです。

福嶋亮大『復興文化論』、開沼博『「フクシマ」論』の読者層はどのような人たちを想定していたか。どちらも東日本大震災を意識させるような内容であると感じるが、想定する読者層に違いはあったか。それぞれ、どのような媒体に広告を出そうと考えたか。その理由はなぜか。

鈴木涼美さんの『AV女優の社会学』は、独特の視点から東京で生きる女性について語ろうとした作品だが、この本を出版しようと思ったきっかけはどこにあるのか。また、この本の編集を担当するときに社内でどのようなプレゼンをしてこの本の出版の必要性を伝えたか。

3冊の本に共通する表紙のデザインとして、白い背景に黒い文字で題名と作者が書かれているということがありますが、何か理由はあるのか。鈴木涼美さんの『AV女優の社会学』だけは題名と作者が横書きで書かれているが横書きにしたこだわりなどがあるのか。文字のフォントや紙の質などを、それぞれの内容のイメージに合わせて作ったのか等についても聞いてみたい。

①青土社は、詩と芸術を主として扱う『ユリイカ』や、哲学と思想を主として扱う『現代思想』を始めとして、神話・哲学・思想・宗教・文学などの人文科学系の雑誌や専門書を中心に刊行していますが、「特にここが他の出版社とは違う強みだ」という事柄は何でしょうか。

②最初の会議で『AV女優の社会学』の企画について立案したとき、まわりの方々はその企画に

対してどういった反応をされたのでしょうか。仮にそのテーマに反論した方がいらっしやっただとすれば、それはテーマのデリケート性に起因するものだったのでしょうか。

③『AV女優の社会学』・『復興文化論』・『「フクシマ」論』はいずれも300ページを超える分量ですが、書籍化するにあたってそうした分量の面で苦労したことはありますか。また、これらの本を売り出すにあたり、営業活動で特に意識した、心がけたことなどはありますか。

まず初めに、かなり目を引くタイトルの「AV女優の社会学」。「AV女優になる」から「AV女優である」ということがとても興味深かったです。最近話題になった動画でもあるように、女性は街中を歩いているだけであらゆる視線に晒されています。日常的に視覚的なセクハラを受けている女性があえて自分から見せるAV女優という仕事は、女性にとってもかなり好奇心をそそられるテーマだと思います。この企画が持ち上がった時、読者は男性を想定していたのでしょうか？それとも女性にこそ読んでもらいたいと考えていたのですか？

次に、「復興文化論」について。

復興と聞くと東日本大震災を思い浮かべてしまいます。東日本大震災に特化した本は2011年内にも発売されてるにもかかわらず、こちらは2013年10月に発売ということで少し遅めなのかなと思いました。それには復興＝東日本大震災と結びつけることへの反抗的な意味合いも含められているのでしょうか？

編集を御担当されている記事が多岐に渡っているが、ご自身が御担当されるコンテンツは、それぞれもともとご興味があったり、専攻分野だったりするのでしょうか。また、もしも仕事を通して自分が門外漢の分野を担当することになったら、その際にはどういった方法で勉強をされているのでしょうか。（本を読む、人に聞くなど）普段のお仕事も膨大だと思いますので、その中で意識している情報のインプット方法も伺えればと思います。

お仕事を通して常にその分野のフロントラインに立つ方々とお会いする機会も多いかと思いますが、その際にビビってしまうことなどないのでしょうか。また、そうした執筆者の方々の書いた文章を、出版社の一社員という立場の編集者の方がリライトするということについても、その行為に自信を持つことができるのでしょうか。（失礼かつ、ぶしつけな質問をお許しください。私も来年から某出版社に勤める予定です。上記のようなことを考えてしまっただけで日々戦々恐々としておりますので、手厳しいご意見、アドバイスなどあれば是非お願いします。）

「AV女優の社会学」のインタビューを読んで、不思議なほどまでに、私自身が著者に聞いてみたいこと、疑問に思っていたことが尋ねられていました。インタビューを行う際の質問は、(長

年の経験もちろんあるのだらうと思いますが)どのようなことに注意して、考えていらっしゃるのでしょうか。また、インタビューをするための準備として、本を熟読する以外にどのようなことをなっているのでしょうか。また、AV女優という一般的には公にはなかなか聞きにくい対象についてのインタビューは、正直やりにくいのか、もしくは全然そんなことはないのかも知りたいです。復興文化論の書評の中には、多少著者の主張にたいして疑問をなげかけている箇所がありましたが、書評を書くにあたり、そのような賞賛以外のコメントはどの程度まで許されるのか、知りたいと思いました。フクシマ論は要約が主であり、本の内容が分かりやすいなと感じた一方で、書評者自身の考えが復興文化論に比べて割合が少ないと感じました。そのような割合は、どのような判断で決めているのかも知りたいです。

どの内容も大きな枠組みで言うと社会問題に特化したものとなっているが、詳しい内容は大きく異なる。それによる苦労もたくさんあるのではないかと考える。また、編集者は世に出すための監査役のようなイメージを抱いているが実際はどのようなのだろうか。

また、編集者という立場であると様々な問題に対して広い範囲で深い知識が必要不可欠になってくるのだと思うが、どういった方法で情報収集をしているのかということをお聞きしたい。

そして、今の担当が希望のものであるのか、希望であるのだとしたらなぜ社会問題に特化したものに関わる仕事に就こうと思ったか、また、希望でないならばどのようなジャンルのものに興味を抱いていたのかお聞きしたい。

そして、編集者という特殊な職業へついたきっかけや動機などがあればお聞きしたい。

書評を読ませていただいて…

菱沼さんは様々な分野の書籍を手掛けておられるが、それはなぜか。また一読者としてではなく一編集者として様々な分野の本に触れることの最大の魅力はなんであるのか教えていただきたい。

正直なところ、今まで編集の仕事をしてきた中で猛烈に反意を覚えた作品は過去にあったのか、あった場合そのような作品とはどのように向き合いそれを導いてきたのかを教えていただきたい。

編集者として出版業界で生きていく中で、自分が変わったと思う最大の点は何か教えていただきたい。また次世代を担っていく編集者たちはどのような精神で臨むべきか、これからの時代の編集者に必要とされていることに関して、菱沼さんの意見をお聞きしたい。

『復興文化論』や『フクシマ論』など、企画のなかでターゲット層を絞ることが一見すると難しく思うのですが、どのようなプロセスでどんな層に売り込もうと決めたのか、お聞かせください。

編集者としてではなく、個人的な意見として、本で述べられている内容に明らかに賛同できない

部分があった場合は、それを飲み込んだりせずに著者に正直に意見を出しますか。

『AV女優の社会学』では、「AV女優そのもの」に興味を持つ読者、「社会学」に興味を持つ読者、もしくはその両方に興味を持つ読者などがこの書籍の狙うターゲット層になりそうなところですが、書籍が発刊された後の結果や反応をみて、企画の段階と異なるものを個人的に感じられたものがあればお聞かせください。

・タイトルにある「AV女優」「復興」「フクシマ」「ムラ」という言葉は「目にしたらひっかかって気になってしまう」強い言葉である。そのような強烈な印象で本を手にとらせようとする意図が感じられるが、これはわざとやっているのか。(例えば、「フクシマ」という言葉は嫌な人もいだろうから回避する選択肢もあっただろう。) それとも菱沼さんはそのような印象の強いテーマを一貫して選んでいるのか。(たとえば AV 女優ではなくモデル・ミスコンであったら内容が一緒であったとしても、テーマの持つ引力はかなり違う。)

また、そのような「目に付く主張の強いもの」は社会に溢れかえっていてどれも週刊誌の中吊り広告のようだと思うのだが、そのような風潮について考えていることがあったら教えていただきたい。

・『AV女優の社会学』『復興文化論』『「フクシマ」論』のテーマは、それぞれ日常に浸透していて、何も考えず過ごしては気がつかないようなことを掘り下げていच्छるように思いました。むしろ、埋れてしまっているようなものを「文化」として掘り起こし、脚光を浴びせていच्छるような気すらします。どういった経緯で以上三つの企画が立ったのかをお伺いしたいです。(元々気になっていたテーマであり著者を探したのか、著者の方を先に知り相談しつつ企画を立てたのか、など)

・企画を立てるためのネタ探し(という言い方は適切でないかもしれませんが)は、本屋に並ぶ書籍や新聞、ネットやフィールドワークからなど、どのようにして行っていच्छるのでしょうか。

これらの書評を読み、特に印象に残ったものが『AV女優の社会学』でした。AV は特に男性であれば非常に日常的なコンテンツであるのに、その AV 女優がなぜ AV に出演するに至ったのかはということは知る由もありません。はたして彼女たちに AV に出演する必要があるのか? といったモヤモヤとした感情を抱いている男性も多く、なんとなくカネや性の匂いがするアングラなコンテンツというのが AV に対する一般的な認識だと思います。この本はそれらをつまびらかに明かし、さらには現代社会で女性が「性的対象」であることが日常の中に浸透していることなどにも言及しています。いままで見た AV を題材にする考察本はなんとなく男性をターゲットにしているのだなという事がわかるものばかりだったのですが、この本は女性視点で語られていることもあってかそれらとは違う印象を受けました。

そこで質問なのですが、この本は企画段階ではどのような年齢層、社会階層、性別の人に多く売れるだろうという算段で企画されたものだったのでしょうか?

上記の書評・インタビューを読ませて頂きました。今回は三作品を拝見しましたが、私は特に『AV女優の社会学』が印象的でした。私自信「AV女優」という肩書きばかりに目を向け、実際の人物像に考えが至ることはありませんでした。今回扱われている著書に興味を抱き、ぜひ読んでみたいと思いました。読者としてどのような内容に惹きつけられたのだらうと考察した際に、どの著書も、切り口が斬新であり、扱っている内容が今まで触れられていなかった点が魅力的に思えました。こちらの内容を踏まえて、編集者である菱沼さんにご質問したいとことが2点あります。1点目は編集者である菱沼さんは、著書の編集を担当する際に、どんな目的意識を持って仕事に取り組まれているのか。2点目は、どこまで著書の内容に意見できるのかという点です。よろしくお願い致します。

- ・ 書評を書く上で、一番気をつけていることはなにか
- ・ 書き方に定型はあるのか（これは書かなければいけないなど…）
- ・ 年間どのくらいの本を読むか
- ・ 好きな雑誌などはあるか
- ・ 自分で作品を書きたいと思ったことはあるか
- ・ 編集者として働く前に、学んでおけば良かったと思うこと
- ・ 学生時代やっておくべきだったことは（編集者は関係なく）
- ・ 編集の実務や対人関係などで、他人には教えたくない効果的なテクニックなどはあるか
- ・ ある程度経験を積んでいる作家との付き合い方は
- ・ これまで担当した作家さんの中で、信頼を勝ち取るのが難しかった人はいるか
- ・ 作家と編集者はどのような関係にあるべきだと思うか
- ・ 今までの編集者の経験の中で失敗談・成功談
- ・ 新人編集者を雇うときに、どのような人柄や能力の人を選ぶか
- ・ 編集者にとって最も重要な資質は何か
- ・ 出版業界の今後について

社会学や文化論などごくありふれた学問の中で、AV女優や復興、また原発とかなりセンセーショナルな、それこそ対極に位置するようなものとどう結びついたのか、その着想はどこから来るのか教えてほしいです。書店で見つけたら社会学の本でも手に取るでしょう、という著者の鈴木さんの話もありましたが、まさにこれから売れる本、売らなければいけない本は、読者、買い手の目を引くものであり、意表を衝く内容になるでしょう。『AV女優の社会学』が頭著ですが、AV女優と社会学という落差。それに加えて、無理やりでなく、芯の通った社会学がある。ただ目を引かれて買った人はがっかりするかもしれないが、手に取らせた時点で、編集者としては勝ちだと思います。こういうキャッチーなものを作れるのは、広告代理店やそういった企業にも向いているのではないのでしょうか。実際考えたりはしませんでしたか。

「フクシマ」や「日中関係」という話題とは少しベクトルが異なる「AV女優」をテーマにした本を出版した理由やきっかけになる出来事があったら教えてください。（売れると思った根拠）

タブーであったり、グレイゾーン」の問題に関する本を出版する際に、弊害になることや、意識することなど特にあったら、教えてください。編集者としてこれは本にして出版したいと思ったのに、会社の方針や大人の事情で、破談になったり、企画をつぶされたりすることはあるのですか。本というのは、メディアとしての影響力が非常に大きいものですが、紙媒体で文字化されたものを世の中に排出する際に、信念として掲げているものや、読者に問題提起したいことなどあったら、お聞かせください。

鈴木涼美さんの「AV女優の社会学」についての質問なのですが、挙げられている他の2冊は最近の日本のあり方を日本人が考えるきっかけになった大きな出来事である東日本大震災について触れられた著書ですが、「AV女優の社会学」に関しては読んだわけでは無いのであまりはつきりとは言えませんがあまり関係ないように思えました。前回の授業でも村田さんからお聞きした内容に「本を作るとき、なぜ今この本を作るのかを最も考えるし、それが一番大事」というのがあったので、この本も何故2013年のタイミングで出版されることになったのかをお聞きしたいです。また、AV女優についての本というのは男性の読者にも女性の読者にも何となく堂々と手に取りにくい内容の本だと思うのですが、そのような意識をなくしより読者が手に取りやすいようにするための工夫はされたのかどうかお聞きしたいです。

3冊とも社会学的なことテーマになっており、青土社自体が人文系の書籍を扱う会社であるので、当然のことだと言われるかもしれないのですが、社会学に興味があった、もしくは勉強していたからこれらの本を出そうと思ったのでしょうか？

もしそうならば、最初から編集者になりたくて出版社を受けたのか、社会学的なことをやりたくて、その道のひとつが編集者だったのか教えていただきたいです。

また、ドキュメンタリー映画などを観ている際にも感じることで、ある程度、基礎知識がないとこのような本を出すという企画をすることも、著者に依頼をすることもできないと思うのですが、こういった本を出すにあたって、どれくらい勉強したのでしょうか？

作家さんも編集さんも、普段の生活と仕事の境目がはっきりしない大変なお仕事だと思うのですが、編集者になるにはどのような覚悟が必要かということを含めてお話しいただけたらと思います。

菱沼さんへの質問として、まずは編集者になったきっかけが気になります。学生時代から志望していたのか(在学中になにか出版に関係する活動をしていたのか)や、就職活動のエピソード、アドバイスもありましたら教えていただきたいです。あとは編集者として心がけていることや一番大変な作業はなにか。菱沼さんの考える“売り物になる文章”とはなにか。例えば開沼先生の『「フクシマ」論』を担当した際には、具体的にどのように編集作業を進めていったのかとても興味深いです。また編集者の立場として、今、私たち大学生に読んでほしい、おすすめしたいというような本がありましたら教えていただきたいです。(内容やジャンルはなんでも構いません)

『AV女優の社会学』の著者である鈴木涼美さんへのインタビューで『ブルセラに行くのって、普段の学校の日常とまったく断絶された空間ではなくて、極端な言い方をすれば放課後、部活に



行くか、ブルセラに行くか、カラオケに行くかくらい並列な感じでした』と述べられていることに関して、男性側の観点はまったく違って、男性側はブルセラというのは「商品を買う」ことよりもむしろ「非日常を買う」ような気持ちがあると思います。自宅で観賞できる AV は別として、ピンサロやソープなどの性風俗も同様の「非日常を体験しに行く」という部分がかかなり大きいと思われます。ブルセラ少女や AV 少女が日常の延長で「自らを語る」のに対し、消費する男性側は同じ舞台上積極的に「非日常」を求めて行く。ここの男女間の認識のズレについて所見を教えてください。

例としてあげられている 3 書籍だけでもかなり内容にばらつきがあり、かつ、執筆者だけでなく編集者にも専門知識が求められるように見える。一方で、一般の読者にも伝えるために、「知らない」目線での編集も必要だろう。また、各書籍の内容にふさわしくなるよう、編集や広告の方法も変えなければならない。本のことを徹底的に考えるという以外に、上記のような「バランス感覚」を身につけるために行った訓練(研修?)などがあれば、教えてくださいと思う。また、本になるような面白いネタ・執筆者はどのようにみつけるのかも知りたい。基本的には伝手や、知人からの紹介、インターネットや新聞などでみつける、などだと思うが、例えば「こういうふうにネットを見ていくと面白いものがみつけられる」など、具体的に説明できることがあれば、紹介していただければと思う。

『AV 女優の社会学』について。AV と聞くと、後ろに社会学とついていようが、それだけで少し卑猥な本を連想します。少し卑猥というのは、エロ本というのではなく、AV 男優伝説のような、男性だけが興味をひくという意味です。

書評を読んだだけですが、この本は、大真面目に AV 女優を研究していると感じました。これは、著者が女性だからというのが大きいと思います。では、男性だと、この業界を研究しにくいだろうなと思いますか？

また、著者が女性だからこそ、男性目線で加えたアドバイスなどありますか？特に、それが売れるために。

反対に、男性目線で見ると、これは女性筆者だから書けたと思うことはありますか？

この企画が出てきたとき、どのような印象を持ちましたか？

・編集者には、編集によって掘り下げたい問題関心、テーマというのがあるのだろうか？

紹介された 3 作には、共通点があると思った。それは、どれも既存のアカデミズムや概念にとらわれず、現代社会を新たな言葉で考えている作品だということだ。商品として売れるかどうか、あるいは出版社自体の編集方針も関わるのかもしれないが、菱沼さんご自身が編集する作品を採す上で、考慮されていることがあれば、お伺いしたいと思う。

・人文科学あるいは社会科学系の本を編集し、売ることについて、文芸やビジネス書などその他のジャンルの本との違いがあれば教えてください。一部の国立大学の人文科学系学部の閉鎖が検討されるなど、経済学や理系の学問に比べて、哲学や社会学といった学問は、世間一般ではその意

義が認識されていないように感じる。(343字)

どの著書も、専門的な調査や知識が必要とされるものだが、編集者もその本に必要な知識を持っているのか。持っているとしたら、どのようにして得たのか（著者と一緒にあちこち取材しに行くわけにもいかないと思ったので）。また、『AV女優の社会学』ならそれまで注目されなかったAV女優になった過程や構造が明らかにされている、『復興文化論』なら現代の日本人が復興期にどのような文化的生産を実現できるかが語られている、『フクシマ論』なら原子力を背景とした中央と地方、地方とムラの関係の変化をふまえた開発論や歴史をめぐる考察がなされている、という評価を受けているが、編集者としては社会にどういう影響を及ぼすと予想して出版までこぎつけたのか。

『復興文化論』・『「フクシマ」論』・『AV女優の社会学』の中で、個人的に目を引かれたのはAV女優の社会学である。他の2冊は震災ということで明確な時事的にも明確な必然性があるのだが、AVの研究書が2013年に出版される必然性はなんだろうと少し考えてしまった。というのは、AV女優という職業は今に始まったことではないし、性的なジャンルに関して人文学が切り込むという構図も1990年代の宮台真司さんの援助交際の研究以降は特にタブーではなかったと思うので、どうしてこの類の本が今までなかったのだろうというのが不思議だったからである。ただ、私自身も『AV女優の社会学』が書店の本棚に並んでいたときには興味を引かれて少し立ち読みしてしまったので、やはりこの本にも何か人の関心を時事的な必然性があるのではないかと思う。その辺り、『AV女優の社会学』という本が2013年に出版される社会的な必然性というのを、編集者の立場からどのように考えているのか聞いてみたい。

稚拙ではあるが一応、私が考えたことを添えておく。まず特徴的なのは、タイトルに「社会学」という言葉が入っていて、学術的な本であることが明示されていることである。また、旧来のAVの本だと、表紙のデザインはやはり女性の写真や絵であることが多いのだが、それに対して『AV女優の社会学』の真っ白な表紙はとても印象的である。加えて、この本の推薦の帯を書いているのは小熊英二さんと北田暁さんという、日本の人文系の本が好きな人には極めて名の通った2人である。ここから言えるのは、この本はこれまでのAVのルポ等と比べるとアングラな雰囲気が一掃されていて、正当な社会学の研究として価値がある本なのだというイメージが全面にプッシュされているということである。私がこの現象と関連性があるように感じる現象は、AV監督の二村ヒトシさんの『すべてはモテるためである』という本が同じように2012年末に再版されてからとても売れていて、かつ上野千鶴子さんや國分功一郎さんのような人文系の研究者に評価されているということである。また、この本は「モテ本」として普通に書店のオススメコーナーに置かれていたりもする。これらのことから私が感じるのは、AVを社会的な穢れの部分であると感じる感受性が全般的に薄れてきていて、AVというものを後ろめたさなしに受け入れるような感受性が社会全体にどんどん備わってきているのではないかということである。ただ、ここまでは誰でも言えることであって、本当はこの理由を考えるとところからが、人文科学の腕の見せ所なのだと思うが、今回は余裕がないのでここで終わりにしたいと思う。

編集者の仕事というのは著者が書いたものを売れるように編集し、世の中に売り出すという事なのででしょうか。いまいち、編集者という職業が一体何をして、また著者の文章にどれぐらいテコ入れをしているのか気になります。

AV女優のある意味裏側を切り取った文章はとても面白く、これからAVを見るときに目が少し変わりそうでした。AVといっても女性だけではなく、男性ももちろん欠かせない存在だと思うのですが、そこについては振れていないのですか？世の中の男性はAVに出てくる男優を尊敬のまなざしで見ていると思うので、取り扱ったら面白いのになと思いました。

菱沼さんが手がけて来られた『AV女優の社会学』『復興文化論』『フクシマ論』はどれも、「AV女優（あるいはAV業界人）」や「被災者」など、当事者と非当事者が比較的是っきりと存在する問題を扱っています。こういった本を作る際に、読者の反応としてどのようなことを想定するのでしょうか。当事者と非当事者の反応は、分けて考えるのでしょうか。そして分けると分けないに関わらず、その反応想定は編集作業にどう影響するのでしょうか。特に売り上げを考えた場合、読者の否定的な反応を予測して、内容を抑えたり削ったりすることはあるのでしょうか。当事者の中には過剰な反応を示す人もいると思うのですが、そのあたりをどう考えて編集されているのかお聞かせください。